

二 土器の地域性と文化・技術の変遷

縄文時代は今から約一万二〇〇〇年前から約二四〇〇年前までの約一万年間続いたが、この時代の最大の特徴として石鏃の使用と土器の製作をあげることができ。また、一般的にその期間には草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の六期間に区分されている（第1表）。これらの時期の変遷とともに、地域によって使用された土器が変化し、形成された文化もやや異なってきた。

第1表 縄文時代の時期区分

時代区分		
旧石器時代	12000年前	
縄文時代	草創期	10000年前
	早期	6000年前
	前期	5000年前
	中期	4000年前
	後期	3000年前
	晩期	2400年前
弥生時代		

草創期 国内で発見されている最も古い土器は、長崎県福井洞穴第3層出土の隆起線文土器が約一万二八〇〇年前とされており、愛媛県上黒岩陰遺跡の隆起線文土器は約一万二二〇〇年前とされている。また、長崎県泉福寺洞窟出土の豆粒文土器はこれらより古い土器といわれている（第2図参照）。草創期の後半には爪形文土器・条痕文土器が現れる。これらの土器群は、現在発見されている世界最古の土器群であるが、土器製作の発生が日本列島内であったかどうかは即断できない。土器の用途は大部分が煮炊き用で、形態は当初から丸底と平底の二種類があった。なお、縄文時代の土器の器形には、深鉢・浅鉢・壺・注口土器などがあるが、各時期を通じて普遍的に使用されたのは深鉢である。

狩猟方法では、旧石器時代の槍を中心とした方法から、弓矢とイヌを使った方法へと変化した。新潟県小瀬ヶ沢洞窟からは木葉形尖頭器・有舌尖頭器・石鏃などの狩猟用石器が出土しているが、突く槍↓投げる槍↓飛ばす矢の変化がこの時期にあったとされている。

早期

今から約一万年前の早期になると、土器の様式に地域的な特色が現れる。つまり、関東地方では撚糸文系土器が、中部・近畿・北部九州地方では押型文系土器（第2図参照）が、東北地方でもやや遅れて貝殻沈線文系土器がそれぞれの分布圏を形成した。また、南部九州でも貝殻文系土器や幾何学文を施す塞ノ神式土器が出現する。器形はほとんど深鉢で、底部は尖底から丸底・平底へと変化する。

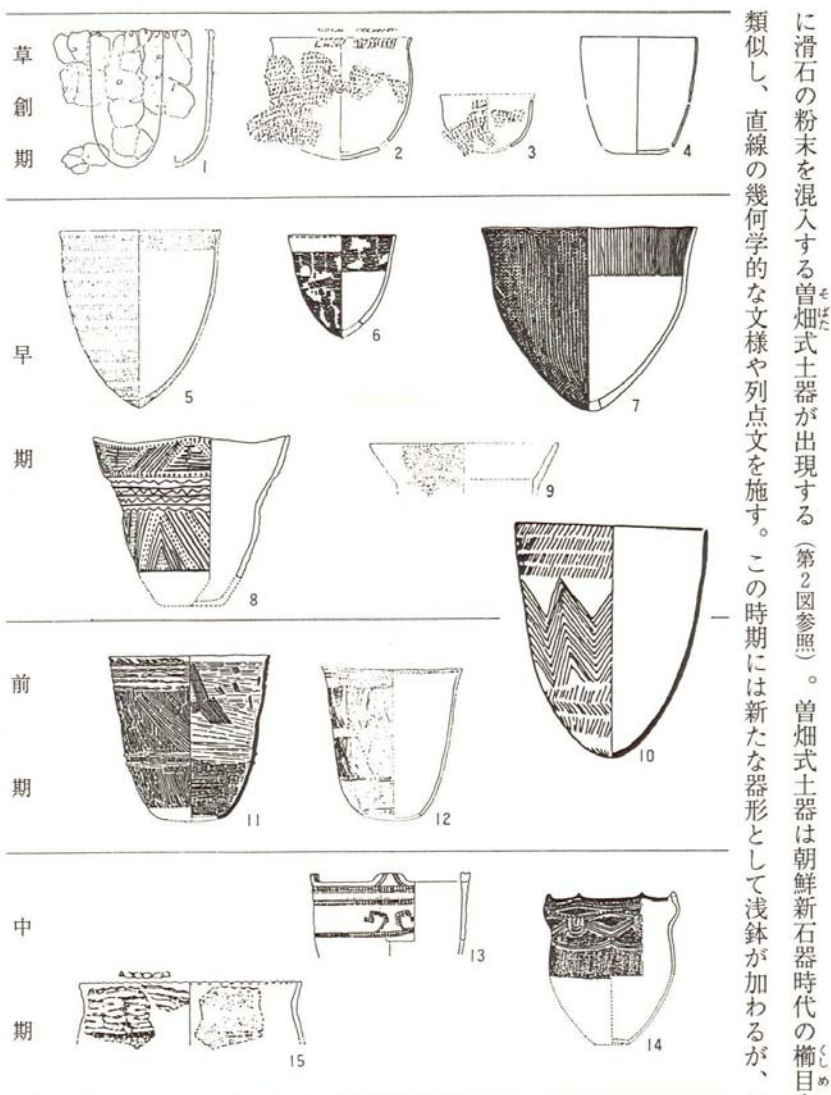
また、この時期には全国各地で堅穴住居が普及し始めるが、これは食料の安定的な確保により定住化が進んだためである。土器様式の分布圏の形成は、この定住化と深く関連し、一定範囲内に生活する諸集団の關係が密接になり、組織化されていった結果と考えられている。

一方、この時期の食料獲得方法として漁労が盛んになる。神奈川県夏島貝塚では九〇〇〇年前の獣骨製の釣針が出土している。また、北海道では漁網用の石錘が発見されており、六〇〇〇年から七〇〇〇年前にはシカの角やイノシシの四肢骨などを素材とした離頭銛も使用されていた。

前期

今から約六〇〇〇年前の前期になると、東日本では土器の素地に植物繊維を混入する繊維土器の技法が広がり、関東地方の羽状縄文系土器、東北地方の円筒下層式土器などに取り入れられている。また、これらの地域では文様として回転縄文が発達した。これに対し西日本では繊維を含まず縄文も施さない、尖底・丸底の土器が展開した。九州では韮式がこの典型であるが、これとは別に胎土中

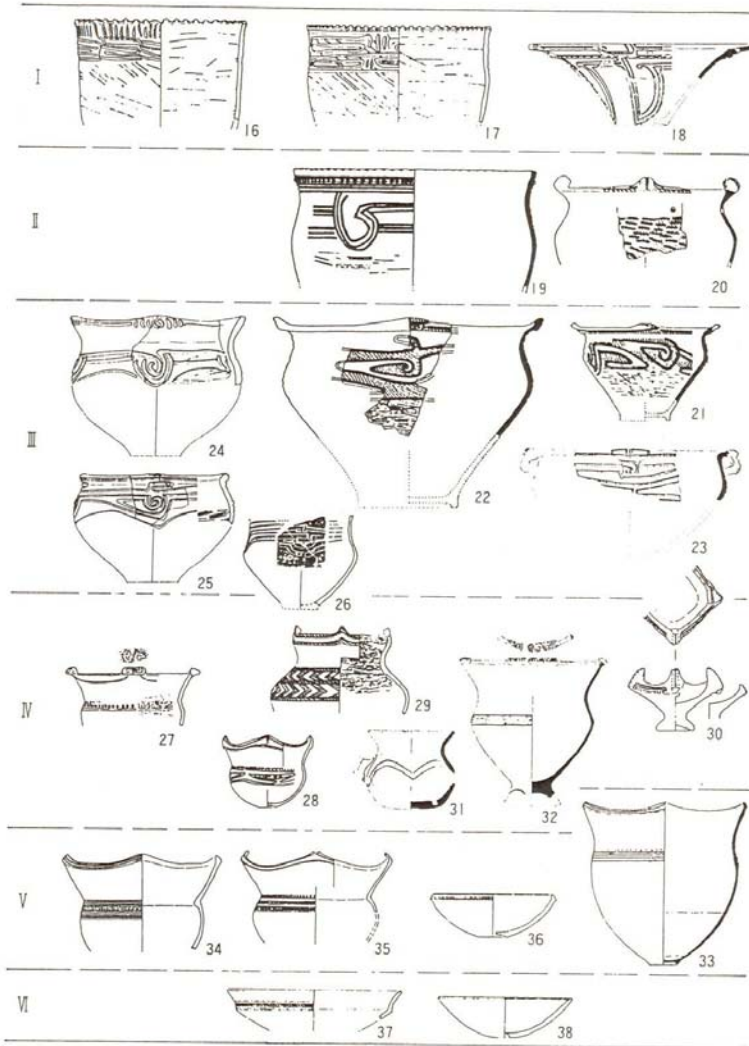
第2章 縄文時代



に滑石の粉末を混入する縄文式土器が出現する（第2図参照）。縄文式土器は朝鮮新石器時代の櫛目文土器に類似し、直線の幾何学的な文様や列点文を施す。この時期には新たな器形として浅鉢が加わるが、これは深

第2図 北部九州の縄文時代草創期～中期の土器

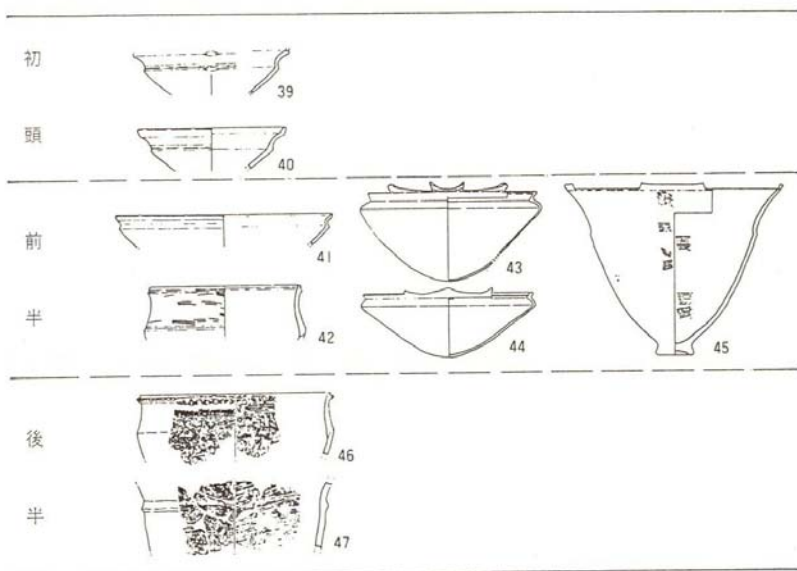
(小池史哲『豊前市史』より)



第3図 北部九州の縄文時代後期の土器

I 西和田・中津 II 小池原下層 III 小池原上層・鐘崎
 IV 北久根山 V 西平 VI 三万田 (小池史哲『豊前市史』より)

第2章 縄文時代



第4図 北部九州の縄文時代晩期の土器

- 1 豆粒文 (泉福寺岩陰) 2、3 爪形文 (門田) 4 無文 (二日市岩陰)
 5 押型文 (成仏岩陰) 6、7 押型文 (柏原) 8 平椀式 (柏原) 9
 塞ノ神式 (合田) 10 櫛目文土器 (ソウル岩寺洞) 11 轟式 (山鹿) 12
 曾畑式 (柿原野田) 13 並木式 (柏田) 14 船元式 (六所権現岩陰) 15
 阿高式 (新池坂本) 16、17 西和田式 (西和田) 18 中津式 (山鹿) 19、20
 小池原下層式 (小池原) 21、22 小池原上層式 (小池原) 23 鐘崎式 (山鹿)
 24、25 鐘崎系 (西和田) 26 鐘崎系 (山崎) 27、28 (山崎) 29 (菊水町)
 30 (垂水) 31、32 北久根山式 (山鹿) 33 西平式 (浄土院) 34~36
 西平式 (原井三ツ江) 37、38 三万田式 (植野) 39、40 御領式 (高畑) 41、
 42 43~45 (春日台) 46、47 (虚空蔵寺) () 内の名称は遺跡名。
 (小池史哲『豊前市史』より)

鉢で煮炊きしたものを取り分けて食事する習慣と関連する。

道具の面では、砥石を用いた研磨の技術が進歩し、磨製石斧が製作される。更に、石匙・石錐など縄文時代の特徴的な器種が出そろう。

中 期

今から約五〇〇〇年前に始まる中期は縄文文化が頂点を極める時期である。関東地方では半截した竹やヘラで施文する竹管文系土器が現れる。中部地方では火炎土器、東北地方でも円筒土器などに隆帯文や波状口縁などの立体的な造形が目立ち、人面や人体象象文を表現するものもある。西日本では近畿・中国地方の船元・里木式土器、九州の阿高式土器などが成立するが、東日本のような豪華な文様は未発達であった。阿高式土器は西九州の中期後半の土器で、前期の曾畑式土器と同じく胎土に滑石粉末を含み、太い凹線による曲線的な文様を施す(第2図参照)。なお、土器は食物の調理以外にも、乳幼児を埋葬する甕棺、住居内の床への埋甕、炉のなかの火鉢としての埋甕などに使用されるようになった。

石器の面では打製石斧が大量に作られており、中部地方から関東西部地方を中心とした地域でイモ類を栽培する際の土掘り具として使用したとする「縄文中期農耕論」の論拠ともなっている。他の地域でもこのような植物性食料の原始的な栽培が行われていた可能性はある。

後 期

約四〇〇〇年前から始まる後期は、土器の製作技術や形態のうえで画期となっている。器種では注口土器・浅鉢・台付き鉢・壺などが普及し、個々の土器の器壁の厚さが薄くなり品質が向上した。後期の土器の最大の特徴は、磨消縄文であるが、これは縄文地を沈線で区画し、外側の縄文を磨り消して一部の文様を際立たせる手法である。この手法は全国的に流行し、後期初頭には北海道南部・東

北北部の入江・十腰内式、関東・中部の称名寺式、東海・近畿・中国の中津式などに取り入れられている。九州でも中津式・小池原上層式・鐘崎式がこの典型である。後葉になると九州では磨消縄文が衰え、新たに黒色磨研土器と呼ばれる三万田式・御領式が成立する(第3図)。

この時期関東・東北地方では製塩土器が出現することから、食料を塩漬けで保存することもあったと想像される。また、九州では打製石斧が急増し、磨石や石皿も多いことから、地下茎や球根類を掘り、堅果類の採集も盛んで、食料としていたと考えられる。

晩 期

今から約三〇〇〇年前に始まる晩期には、列島内は東西で異なった土器を製作するようになった。東日本では、磨消縄文手法を受け継いだ亀ヶ岡式土器が広範囲の分布圏を誇った。一方西日本では、縄文などの装飾を施さない磨研土器が後期に続いて流行した。磨研土器は表面を丁寧に磨いた土器で、精製土器である。器種としては、深鉢・浅鉢・椀・高坏・注口土器などがある。これに対して、表面の整形が貝殻などの条痕やナデ調整のままで使用する粗製土器がある。粗製土器の器種は一般的に深鉢や甕形土器である。九州地方では、晩期前半には口縁部が「く」の字形をなし、上端部にリボン状の帯を張り付け、胴部上位が強く屈曲する精製土器の浅鉢が代表的な器形である(第4図参照)。後半になると口縁端部に刻み目の突帯をめぐらす甕形土器が使用され、壺も作られる。これらの甕や壺は、弥生時代に受け継がれる。

晩期後葉には北部九州の玄界灘沿岸の遺跡で、太形蛤・刃石斧・扁平片刃石斧・石庖丁・磨製石鏃・石剣などの大陸系磨製石器と木製農具が発見される。これらは水稲耕作に従事した集団の遺跡で、佐賀県菜畑遺跡などでは水田跡も発見されている。